

エウセビオス『教会史』における フィランソロピアの用例

土井 健司

というも、世界に対して好意から配慮することは、神にこそもっとも固有で自然本姓的なことだからです⁽¹⁾。エラスムス『格言集』3001番より

1. はじめに

ルネサンスの人文主義は「ストゥディア・フマニタティス」、即ち「フマニタス」の研究を自らの課題としたと言われる。それはギリシア語、ラテン語による古典文学の研究であり、ロッテルダムのエラスムスはその道を切り開いたことで著名である。そもそもフマニタスは「人間性」を意味するものだが、実はギリシア語のフィランソロピア（人間愛）のラテン語訳でもある。「パイディア」たる教育も同様にラテン語では「フマニタス」とされるが、フィランソロピアは教育の目的、人間が人間として教育の結果身につけるべき有り様、振る舞いの総称として捉えられている。では、そのフィランソロピアの内実は何か。その意味が多様であることは辞典を一瞥するだけで明白であって、一言で尽きるものではない。そもそもフィランソロピアという概念は紀元前5世紀にアイスキュロスの『縛られたプロメテウス』において初めて文献上確認できるものである。ホメロスには見られないので比較的新出の概念だと言えるが、紀元前四世紀以降は頻繁に使用されるようになる。キリスト教文学を見ると、新約聖書には三度しか現われず、使徒教父文書にいたっては皆無であるが、ユスティノスなど弁証家において見られ、とりわけアレクサンドリアのクレメンス以降は頻出していく⁽²⁾。本稿では、さまざまなギリシア教父文献の中でも、四世紀カイサリアのエウセビオスの著した『教会史』における用例を考察していきたい。

カイサリアのエウセビオスは260年頃に生まれ、339年頃に亡くなったギリシア教父の一人である。『福音の準備』、『福音の証明』や『コンスタンティヌスの生涯』など

(1) Id enim Deo maxime proprium ac naturale suo beneficio consulere uniuersis. *Adagiorum chiliarum quarta (pars prior)*, *Opera Omnia Desideii Erasmi Roterodami*, II/7, p.14, 87-15,1. 本稿は、長年にわたって学問的な刺激を与えて下さったエラスムス研究者である木ノ脇悦郎先生への謝意を込めて書いたものであり、冒頭にエラスムスの引用を行なった。

(2) 土井健司「他者論としてのフィランソロピア論」、三井善止編『他者のロゴスとパトス』所収、玉川大学出版部2006年、139-160頁。

多くの著作があるが、「教会史の父」と言われるように、「教会史」という文学類型をはじめて確立した人物である。彼の『教会史』は全10巻から成り、第7巻まではディオクレティアヌス帝の迫害前に執筆されるが、その後の状況の変化に応じた度重なる改訂のため最終的に324年に完成した⁽³⁾。弁証的意図を有し、救済史を普遍史と結びつける構想のもと第1巻冒頭で世界に先立つロゴス論からはじめ、キリストの到来から始まる教会の歴史を論じ、第10巻でコンスタンティヌス帝において歴史が頂点に達したと見る。つまりローマ帝国とキリスト教の発展との結びつきを強調し、コンスタンティヌス帝において神の計画が完成したとする⁽⁴⁾。

フィラソロピアの概念史におけるエウセビオスの評価は大きいものではない。しかし統治者の徳、ローマ皇帝の徳としてのフィラソロピアを論じたとき、その影響下にテミスティウス、ユリアヌス帝のフィラソロピア論が展開するとされる⁽⁵⁾。本稿は概念史の評価について検討するものではないが、前半について他の可能性も検討してみたい。さらに豊富な引用と報告に満ちた『教会史』においては伝統的なフィラソロピアの用法とエウセビオス自身のものとが交差している。それゆえその用例を検討することで古代キリスト教におけるフィラソロピア論のいくつかの可能性が提示されると思われる。

2. 統治者の徳としてのフィラソロピア

ギリシア語文献データベースの Thesaurus Linguae Graecae を検索すると、『教会史』におけるフィラソロピアの用例として28例が挙がってくる。その箇所を順番に挙げていくと次のようになる。第1巻2章21節；第2巻14章6節；第3巻7章8節；第4巻26章11節；第5巻2章1節；第6巻5章3節；43章11節；第7巻11章6節；11章7節；32章23節；第8巻12章8節；12章9節（2回）；12章10節（2回）；16章2節；17章9節；第9巻8章14節；第10巻4章11節；4章12節；4章18節；4章59節；8章11節（2回）；9章2節；9章3節；9章4節；9章8節、以上である。

(3) T. D. バーンズ「コンスタンティヌス帝とエウセビオス」、秦剛平・アトリッジ共編『キリスト教とローマ帝国』所収、リトン；1992年、215-251頁、220頁。

(4) エウセビオスについては比較的新しいものとして次の文献を参照。J. Ulrich, Art. Eusebius von Caesarea, in: *Lexikon der antiken christlichen Literatur*, hg. v. S. Doepp und W. Geerlings, Herder; 1998, S. 209-214. また邦語では次の三部作の論集がエウセビオスについて多様な視点からの研究を収めている。秦剛平・H. W. アトリッジ共編『キリスト教の起源と発展』（エウセビオス研究1）、リトン1992年；同『キリスト教の正統と異端』（エウセビオス研究2）、リトン1992年；同『キリスト教とローマ帝国』（エウセビオス研究3）、リトン1992年。

(5) 例えば次の文献を参照。G. Downey, *Philanthropia in religion and statecraft in the 4th century after Christ*, *Historia IV*, 1955, pp. 199-208. ユリアヌス帝については、とくに次の文献を参照。J. Kabiersch, *Untersuchungen zum Begriff der Philanthropia bei dem Kaiser Julian*, Wiesbaden 1960, S. 37f.

これらの用例については末尾に図1に表にしてまとめておいたので参照されたい。これらを見ると、『教会史』における「フィラソロピア」の用法はいくつかの項目に分けることができる。まず通説どおり、統治者についてそのフィラソロピアに言及する箇所がいくつかある。典型的な箇所は、第10巻9章に見られる4つの用例である。ここではコンスタンティヌス帝ならびにその子息について述べられている。まず2節と3節を見てみよう。

リキニオスの狂気がその極限に達したとき、神の友であるこの皇帝には、もはや耐え得るものではないと思われた。そこで皇帝は冷静な判断を下し、正義が要求する厳しい報復をフィラソロピア (φιλαθρωπία) で抑えながらも、この暴君の下で苦しんでいる者たちを救おうと決心し、若干の反対者を排除すると、多数の者を救うために急いだ。皇帝はそのときまで、同情にも値しないこの男にひたすらフィラソロピア (φιλαθρωπία) を示し憐れみをかけてきたが、彼には全く改悛の情が見られず、逆に支配下の諸民族にたいして狂気を増大させた⁽⁶⁾。

このテキストの語る所は明白であろう。狂気のリキニウス帝とコンスタンティヌス帝の対比、コンスタンティヌスは「神の友」であり、それゆえ民衆の救済者であることがフィラソロピアと関連しつつ論じられる。正義にかなった正当な厳罰を緩和し、同情に値しない者への同情がフィラソロピアの内容となる。これは後にユリアヌス帝が統治者や民衆を指導する神官が修めるべき徳としてフィラソロピアを論じるときに、その特徴の一つとして挙げていたものである⁽⁷⁾。

さらに続く4節ではコンスタンティヌス帝の子クリスプス (副帝) について「あのもっとも人道的な (φιλαθρωποτάτω) カイサルである息子のクリスプス」と言われている。その文脈の述べるところでは、このクリスプスを従えてコンスタンティヌス帝は苦しむ喘ぐ民衆を救い出そうとしたというものである。リキニウスに対して立ち上がり闘いを挑むコンスタンティヌス帝とクリスプスの行為がフィラソロピアとして捉えられ、統治者のあるべき姿として語られていく。

8節ではリキニウスに勝利し、ローマを統一したコンスタンティヌス帝の布告に触れられ、「勝利者であり皇帝のフィラソロピアに満ちた (φιλαθρωπιὰς ἔμπλεοι) 布告」と述べられる。その内容はここでは記されていないが、『コンスタンティヌスの生涯』第二巻23章以下に見られるものと推定される。不当に迫害を受けたキリスト教徒に対す

(6) 秦剛平 訳『エウセビオス教会史』全3巻、山本書店1986年-1988年。本稿における『教会史』の邦訳は基本的に秦訳を用いる。なお使用したテキストはGCS所収のシュワルツ版である (E. Schwartz, *Eusebius Historia Ecclesiastica*, GCS Eusebius 2/1-3 1903-1909)。またロエブ古典叢書所収のレイク (K. Lake) の英訳も参照した。

(7) Ep 89b (J. Bidez, *L'empereur Julien Oeuvres completes, Tome I 2e partie Lettres et Fragments*, Paris; Les Belles Lettres, 2003) を参照。

る寛容と回復を述べるものである。そして『教会史』はコンスタンティヌス帝によるキリスト教時代（*tempora christiana*）の到来を神の摂理とする歴史哲学に貫かれており、このコンスタンティヌス帝の勝利の記事で全体が閉じられている。以上をまとめると、悪者に対しても示される同情心、正義を曲げる寛大さ、民衆の窮地を救済しようとする慈悲、これらが統治者のフィランソロピアとして語られていると言える。

これに類した意味を含めて統治者について述べられるフィランソロピアの用例は、第4巻26章11節に弁証家メリトンの引用においてハドリアヌス帝について、また第7巻11章6節と7節においてヴァレリアヌス帝とガレリアヌス帝について、さらに第8巻8節から10節ではアイロニーを込めてディオクレティアヌス帝をはじめとする迫害者たちについて、また同巻16章2節でも同様に、そして同巻17章9節ではガレリウス帝についてそれぞれフィランソロピアが語られている。

3. 神のフィランソロピア

次に取り上げるのは、神のフィランソロピアである。フィランソロピアが最初プロメテウスについて使用されたことから分かるように、この概念は元来神について使用するものであった。この用例は碑文を含め、ヘルメス、医神アスクレピオスなど枚挙に暇がない⁽⁸⁾。神が人間に何らかの恩恵を施すことを考慮するなら、こうした神にフィランソロピアが適用されるのは当然の結果であろう。キリスト教においても同様であり、神についてフィランソロピアを付す用例は多数見られる。この点キリスト教の場合に固有のものは、神の受肉、即ち神のロゴスの人間化についてフィランソロピアが用いられることである。たとえばピリピ書2章9節のケノーシスを神のフィランソロピアと解釈する（10, 4, 11）。この用例はとくにオリゲネスにおいて多数見出すことができる⁽⁹⁾。

『教会史』においても同様に神のフィランソロピアを論ずる箇所はいくらか見られる。第10巻4章11節には、キリスト教迫害の終了を祝い、エウセビオスが演説する場面が描かれており、そこにこの意味でのフィランソロピアの用例が見出せる。祝福の演説の途中、イエスを称える部分にあたるが、11節は次のように語られる。

なぜならば、その方だけがすべてに憐れみ深い父の唯一の、すべてに憐れみ深い子であり、父のフィランソロピアの意志から（*γνώμη τῆς πατρικῆς φιλανθρωπίας*）、破滅の底にいるわたしたちの性質をまさにすすんで自分の身にまとわれたからで

(8) 『パウリー-古典学事典』の第2集第19巻に見られるシュミット（J. Schmidt）による項目 *Philanthropos* には神の異名としての用例が多く挙げられている。

(9) 土井健司『愛と意志と生成の神』、教文館2005年、特に第4章を参照。

す⁽¹⁰⁾。

ここでは父なる神のフィラソロピアに言及される。イエスは御父の意志を受けて人間に成るのであるが、その御父について「父のフィラソロピアの意思」と語られている。それは人類の救済を意図するフィラソロピアであるが、フィラソロピアを情念の一つとして捉えるならば、この箇所はオリゲネスの『エゼキエル書講話』第6巻6章との関連も推定可能であろう⁽¹¹⁾。父なる神がフィラソロピアに動かされて人間の救済を意図したのである。

さらに同様に御子についてフィラソロピアが語られるのが、続く12節である。

かつてのように今も人間を愛する熱意から (σπουδή τῆ φιλανθρώπου)、誰もが、いやわたしたち自身も予想しなかったような救いを与え、父の豊かな祝福に与らせてくれました。その方こそ命を与えられる方、光をもたらず方、わたしたちの偉大な医者・王・主である方、神のキリストです⁽¹²⁾。

キリストの「人間愛を愛する熱意」とは受肉への熱意ことであり、それは誰も予測できなかったことだったと述べられている。御父も御子も人間に対するフィラソロピアに満ち、救済を意図し実行したと言う。このときの演説のなかでもう一つ、王であるキリストの法のフィラソロピアを述べる箇所があるが(4章18節)、そこでは文化が問題となっていて、キリストの律法が最も文化的であると述べられている。

さらにキリストである神の先在のロゴスについてフィラソロピアを述べるのは第1巻2章21節である。そこではモーセ以前の人々にもロゴスが現われたことが論じられている。なお直接神についてはないが、神と同様に「摂理」についてフィラソロピアを使用する例もいくつか見出され、これには第2巻14章6節、第3巻7章8節、また10巻4章59節が該当する。なお本稿冒頭のエラスムスの文章も、ギリシア語のフィラソロピアという言葉こそ使われていないが、その意図するところは受肉を頂点とした神のフィラソロピアの思想から来るものであろう。

4. 施しとしてのフィラソロピア

フィラソロピアが神から人間への恩恵、王から家臣、民衆への恩恵を意味することを考慮するなら、それが「親切」や「施し」の意味で使われるとしても驚くにあたらない。この点『教会史』の用例を検討するなら、第7巻32章23節においてパレス

(10) 秦剛平訳172頁。

(11) 「御父ご自身ですら決して無情なわけではない。御父も求められれば、憐れに思い、痛みを感じられる。御父は愛の情念を苦しみ、ご自身の本姓の偉大さと並び立ち得ない状態になられ、われわれのために人間の苦しみを得られるのである。」なおこの箇所の解釈については拙著『愛と意志と生成の神』111頁以下を参照。

(12) 秦剛平訳172頁。

ティナの司教テオドトスについて「自分に助けを求めてきた人々に人間愛に満ち（φιλανθρωπιάς）、誠実で、同情的で熱心であった」と述べられている。殉教者たちが迫害者に対してもフィランソロピアであったと述べる箇所も同様に親切、思いやりに満ちていたという程の意味であろう（第5巻2章1節；第6巻5章3節）。これらは意味として特徴は認められないが、フィランソロピアの主体について「司教」と「殉教者」に言及している点がキリスト教的であろう。

さて「施し」についてフィランソロピアが用いられているのは、第6巻43章11節に見出せる。ローマの司教コルネリウスの書簡の引用であるが、そこには「主の恵みとフィランソロピア（φιλανθρωπία）によって養われている1500人以上の寡婦や困窮者がいる」と記されている。コルネリウスは251年から253年までローマの司教を勤めた人物であるので、3世紀中頃のローマ教会には1500以上の寡婦や困窮者が寄留しており、教会から扶養を受けていたことになる。ここではそれがフィランソロピアとして語られている。

さらに第10巻8章11節では、リキニウスの不法な法について論じられる中で、獄で苦しむ者に食物を与えることが禁止されたと語られる。その中で食物の差し入れをフィランソロピアと呼んでいる。リキニウスの法について、何人も自然の感情に動かされて隣人に同情したくなっても親切を働いてはならないのだから、フィランソロピアを否定していることになるという。フィランソロピアを自然の感情と捉えているところは、同じ4世紀に最終的に成立した偽クレメンス文書『講話集』第12講話32節では「自然に逆らう」こととしてフィランソロピアが論じられ、これと対照的であろう。さらに次節で見る箇所では、東方地域で生じた飢饉と疫病が蔓延する中でキリスト者がパンを与えるなど施しを行なうことを指してフィランソロピアが使われている。

5. 死者に対するフィランソロピア

以上、『教会史』におけるフィランソロピアの用例のほとんどを確認・検討してきたが、施しと並んで死者への世話をフィランソロピアと述べる箇所が残されており（第9巻8章14節）、最後にこれを考察しておきたい。

しかし、そのときキリスト教徒があらゆる点で熱心と敬虔さをもっていることがすべての異教徒に明らかにされた。例えば、彼らだけがそのような恐ろしい災禍のただ中であって、思いやりと人間愛（τὸ φιλάνθρωπον）を行為によってはっきりと示した。ある者は終日、死んで行く者たちの面倒を見、その埋葬に心を砕いた（その数は夥しかったが、誰も彼らの世話をしようとしなかった）。またある者は、飢えのために衰弱しきった町中の多くの者を一か所に集め、すべての者に

パンを与えた。そのため、彼らの行為はすべての人びとの口に上った。そして、人びとはキリスト教徒の神を賛美し、また、彼らのさまざまな行為そのものによって納得し、彼らだけが真に敬虔で神を恐れる者であることを認めた⁽¹³⁾。

冒頭「そのとき」とあるが、それはマクシミヌスが東方の支配者であり、312年頃東方の諸都市で生じたキリスト教迫害の時と推定される⁽¹⁴⁾。おそらくはカイサリアのことであろう。

ここではフィランスロピアの実例として「施し」と「死者の世話」の二つが挙げられている。施しについては、前節で確認したとおりである。死者の世話については、邦訳では「死んで行く者たちの面倒を見、その埋葬に心を砕いた」とある。しかし厳密に見るなら「死者の面倒を見、その埋葬に心を砕いた」とすべきであろう。というのも「死者」(οἱ θνήσκοντες)は「埋葬」にも続いているからである。つまり「死んで行く者たちの埋葬」というなら、未だ生きている者の埋葬となるのでふさわしくない。ここで使われている οἱ θνήσκοντες は、それが「埋葬」にもつながっている以上、厳密には「死者」と訳したい。しかし「死者」とはどのような者のことか。

実は οἱ θνήσκοντες は「死んでしまった者」のことではない。なぜなら θνήσκων は現在分詞であって、完了分詞ではないからである。この θνήσκω という動詞は、完了時制ならびにアオリスト時制のときに「死んでしまった者」「亡くなった人」を意味する。したがって完了分詞の τεθνήκοτος と言えば、「亡くなった人」である。しかし現在分詞では、「死につつある」を含意するのである。その点で邦訳者が「死んで行く者たち」と訳するのは一理ある。そこで、確かに「死者」と訳すべきではあろうが、この場合は「死につつある状態」も含意したもとして「死者」を捉えなければならない。つまりここで使われている「死者」(οἱ θνήσκοντες)とは、死につつある状態から死んでしまった状態までの覆う概念として使われているのである。その意味で死は一連の過程として捉えられ、死の瞬間のような一点は考えられていない。さらに、ここで使われる「世話」(κηδεία)はしばしば「葬儀」を意味するが、ここでは「死に行く者」に対する κηδεία である以上、葬儀ではなく、邦訳者のように「面倒を見る」あるいは一般に「世話」でよいであろう。その内容は不明であるが、このような仕方で死者の埋葬とならんで死に行く者の世話をすることがキリスト教的フィランスロピアとして語られる。さらに報告では「その数は夥しかったが、誰も彼の世話をしようとしなかった」と加えて述べられる。多くの死に行く人々が打ち捨てられていた。この打ち捨てられていた死に行く者の世話と死者の埋葬に心を砕く。これがキリスト者

(13) 秦剛平訳、141頁 [一部変更]。

(14) バーンズ「コンスタンティヌス帝とエウセビオス」、228-231頁。

エウセビオス『教会史』におけるフィランソロピアの用例（土井）

のフィランソロピアとして語られるのである⁽¹⁵⁾。

エウセビオスの同書には、疫病におけるキリスト者の働きについて同内容の記事がアガペーとフィラデルフィア（兄弟愛）の概念のもとで論じるアレクサンドリアの司教ディオニシオスの書簡が引用されている（第7巻22章6節－10節）。ここでは看病したキリスト者が次々と病に倒れ亡くなっていくことを「殉教に劣るものではない」と述べ、看護者を殉教者に譬えている。上記9巻の記事には看病した者の死は語られないが、同内容と見てよいであろう。そこでディオニシオスが「アガペー」と「フィラデルフィア」で表現したものをエウセビオスが第9巻8章14節において「フィランソロピア」で表現したとすれば、エウセビオスはアガペーやフィラデルフィアではなく、フィランソロピアを積極的に使用したと言えるが、これについて現段階では推測の域を出るものではない。

6. まとめ

以上エウセビオス『教会史』におけるフィランソロピアの用例をすべて検討してきた。まずフィランソロピアは、「統治者」に使われ、その理想として捉えられているという点が確認される。迫害する皇帝たちの偽りのフィランソロピアに対して、迫害を中止させ、キリスト教を擁護する皇帝の真のフィランソロピアが語られていた。そのような統治者のフィランソロピアの理想は、神のフィランソロピアと重ねられている。神こそがフィランソロピアの源である。父なる神も御子もともにフィランソロピアから人類の救済を意思する。御子の場合それは受肉に帰結する。こうした神のフィランソロピアとその模倣として統治者や有徳者のフィランソロピアというのは古代ギリシアの時代から見られるものであるが、思想史的な評価については稿を改めたい。王権と神の権能との結びつきは政治的な面もあり、エウセビオスの他の著作との関連でさらに考察に必要があろう。また、統治者と神の他には、司教や殉教者のフィランソロピアも言及されていた。

フィランソロピアの内容面について見ると、興味深いものとして「施し」の意味でのフィランソロピアが見られた。これは4世紀後半になるとカッパドキア教父たちが実践的にも展開するものである。少なくともニュッサのグレゴリオスにおいてフィランソロピアはフィロプトキア（貧者愛）となるが、その萌芽の一つがここに見出され

(15) 四世紀半ば過ぎに背教者ユリアヌス帝は、キリスト教（＝無神論）の拡大について死者への世話をその原因の一つに数えている（『書簡84』[Bidez版; 429D]）。「なぜこれで十分だと思うのか。よそ者へのフィランソロピアと死者の埋葬への留意、そして生活において形成された聖性が、この無神論（＝キリスト教）をどれほど拡大させたのかをわれわれは注意しないのか。これらはわれわれによってこそ真実に実践されるべきものだと考える。」

る。さらに、フィラソロピアの対象として注目すべきは、死に逝く者を含めた「死者」への世話をフィラソロピアとして述べていたことであった。疫病が蔓延するなか人びとは死に逝く人びと、死んだ人びとを等閑にする。キリスト者はこの人びとの世話をし、最後は埋葬を行う。これがフィラソロピアの例として述べられているのである。

以上エウセビオスの『教会史』におけるフィラソロピアの用例は、キリスト教的フィラソロピア論を形成する一資料として貴重な情報を提供している。キリスト教思想史におけるフィラソロピアの水脈について、エラスムスを含めたその詳細な検討は今後の課題としたい。

付記 本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）：「四世紀カッパドキア教父の救貧の思想と実践」）の交付を受けてなされた研究成果の一部である。

図1 エウセビオス『教会史』における φιλανθρωπία ならびに関連語の用例一覧

巻・章・節	内 容	φιλ の主体
1, 2, 21	モーセ以前の時代の人類に、先在のロゴスが「み使い」「救済の力」で現われたことについて、フィランソロピアからと説明される	先在のロゴス
2, 14, 6	「すべての善を愛し、すべてのもののなかでもっとも人間愛に満ちた摂理」がペトロをローマに派遣したこと	摂理
3, 7, 8	「すべてに恵み深い摂理の人間愛」：ユダヤ人は、イエス殺害後40年も破滅を免れていた	摂理；反ユダヤ
4, 26, 11	弁証家メリトンの皇帝宛の弁明書の一節に、皇帝を「よりフィランソロピス」とする箇所の引用	皇帝
5, 2, 1	殉教者たちのフィランソロピア：続いて語られる部分のどこかは特定は困難であるが、おそらく拷問を加えた者のための祈りのこと	殉教者
6, 5, 3	殉教者ポタミアナに対する兵士バシリデスのフィランソロピア（やさしさ）と殉教	殉教者
6, 43, 11	ローマの司教コルネリウスの書簡におけるローマ教会の様子：「主の恵みとフィランソロピアによって養われている1500人以上の寡婦や困窮者がいる」	救貧
7, 11, 6	いずれもヴァレリアヌス帝とガレリアヌス帝のフィランソロピア（慈悲；棄教すれば救済されること）に言及し、神々への礼拝などローマ社会への適応を求める	皇帝
7, 11, 7		
7, 32, 23	パレスティナのカイサリアの司教テオドトスについて「自分に助けを求めてきた人たちに親切で、誠実で、同情的で、熱心だった」	テオドトス
8, 12, 8	ディオクレティアヌス帝の迫害を述べる文脈に属し、迫害の悲惨さを述べたあと、最後の迫害について述べる。主に皇帝、迫害者たちのフィランソロピアが語られて迫害の中止を述べた直後に、キリスト者の目をえぐり出し、片足を不具とする命令が出た。これが彼らのフィランソロピアだと皮肉をこめて述べられる。	皇帝、迫害者
8, 12, 9		
8, 12, 9		
8, 12, 10		
8, 12, 10		
8, 16, 2	迫害の終了について、世間で言われているように統治者のフィランソロピアによるものではないと否定される。	統治者
8, 17, 9	ガレリウス帝の寛容令の引用があり、この中に自分たちのフィランソロピアのゆえに迫害を中止するとある	統治者
9, 8, 14	飢饉と疫病のさなかにおけるキリスト者のフィランソロピア	キリスト者
10, 4, 11	迫害の終了を祝ってエウセビオスのなした演説：御父のフィランソロピアの意志から御子が受肉を果したこと（ピリピ書2章9節）。さらにキリストの救済行為が病気を癒す医師になぞらえて論じられる。	御父なる神
10, 4, 12	前節と同じ文脈にあるが、今度は救済行為を働くキリストのフィランソロピアに言及される	キリスト
10, 4, 18	エウセビオスのなした演説：王であるキリストの法のフィランソロピア。文化的と同じ意味	キリストの法
10, 4, 59	エウセビオスのなした演説に続いてパウリノスの祈祷のなか：墮落した魂をロゴスが御父のフィランソロピアを受けて救済に向かう	御父なる神
10, 8, 11	リキニウスの愚行、無法な法の制定をなしたこと：獄で苦しむ者に食べ物を与えるフィランソロピアの禁止、さらに「何人も自然の感情に動かされて隣人に同情しなくなっても、決して親切であったり親切な働きをしてはならない」というフィランソロピアの否定	食を与えること 親切な行為
10, 8, 11		
10, 9, 2	コンスタンティヌスは、「正義が要求する厳しい報復をフィランソロピアによって抑えつつ」も、リキニウスのもとで苦しむ人々を救おうとした。また帝のリキニウスへのフィランソロピア、フィランソロピアに満ちた息子の副帝、最後にコンスタンティヌス帝のフィランソロピアにみちた寛容令に言及	正義を緩和するものとして、また皇帝のフィランソロピア
10, 9, 3		
10, 9, 4		
10, 9, 8		